

# 目取真俊「風音」の改稿について

仲井眞 建 一

## ◆一 「風音」の成立背景

一九八五年『沖繩タイムス』に掲載された「風音」は、作者目取真俊のこだわりが深いようで、長編『風音 The Crying Wind』（リトル・モア 二〇〇四年四月）に至るまでの一九年、三回の大きな改稿がなされている。

初出「風音」は、沖縄県の地元紙『沖繩タイムス』に一九八五年一二月二五日～一九八六年二月五日まで合計四〇回連載された（以後「初出」とする）。それから二二年後、芥川賞受賞作「水滴」を含む短編集『水滴』（文藝春秋 一九九七年九月）に、「大幅な加筆修正」を受け収録される（以後「改訂版」とする）。さらにその七年後、『風音 The Crying Wind』として、長編に姿を変えた。<sup>(1)</sup>改稿の状況に関しては『風音 The Crying Wind』の「あとがき」に詳しい。

最初に「風音」という小説を書いて発表したのは、一九八五年のことである。（略）

それから二二年後の一九九七年、（略）「風音」を大幅に加筆修正してその本（※筆者注『水滴』）に入れた。

昨年（二〇〇三年）四月、「風音」の映画化の話が出て、脚本を担当することになった。元の小説の設定を何カ所か変え、新たに登場人物や内容を加えて、一月ほどかけて第一稿を書いた。（略）

七月下旬から九月初旬にかけて、沖縄島北部の今帰仁村や本部町を中心に映画の撮影が行われ、一月には映画『風音』の完成試写会が開かれた。

私の方は脚本を渡して以降、別の仕事をすませ、九月から十一月にかけて「風音」の小説化に集中した。こうして書かれたのが『風音 The Crying Wind』である。（傍線筆者）

『風音 The Crying Wind』と、初出・改訂版との違いは村上陽子が「喪失、空白、記憶―目取真俊「風音」をめぐる―」で指摘している。初出・改訂版において重要な役割を担っていた藤井や泉が削除され、代わりに藤野という女性に置き換えられているほか、新たな村人の視点、家庭内暴力の要素も加えられ、前二作で破壊された泣き御頭も壊れることはない。改訂版は「大幅に加筆修正」とあるのに対し、ここでは一度映像化を経た「風音」の「小説化」である。つまり「風音」は初出・改訂版において地続きであったものの、『風音 The Crying Wind』では切断している。そのため改稿過程を論じるにあたり、初出・改訂版を主な対象とし、『風音 The Crying Wind』は別作品として扱う。またこのような目取真俊の発言だけに依るのでなく、表現や描写、モチーフにおいても切断していると考えるが、これは論考の最後に言及するにとどめた。

まずは梗概をたどっていきながら、初出と改訂版の違いを確認しておきたい。初出から改訂版で削除された箇所には「●」の記号の後に傍線を付し、逆に改訂版で付け加えられた箇所には「◆」の記号の後に傍線を付した。

舞台は沖縄県北部の村、その村の崖には、古い風葬場があり、特攻隊員の頭蓋骨が安置されていた。風が吹くと、まるで泣いているかのように音を発するところから、その頭蓋骨は「泣き御頭」と村人たちには呼ばれている。村の少年アキラは、友人らとその泣き御頭の横に、テラピアの入ったピンを置くという賭けを行う。崖を登

り、ピンを横に置くと、不意にカニが現われ、アキラを風葬場から追い落とす。同じころ、アキラの父、清吉のもとに、本土のテレビ局から藤井と泉という二人の男が訪ねてくる。二人は泣き御頭の取材のため、戦中特攻隊員の死体を風葬場に運んだといわれる清吉のもとを訪ねたのだ。しかし清吉は取材を断る。清吉は沖縄戦のさなか、清吉の父と風葬場に泣き御頭を安置した。清吉は、その特攻隊員の所持していた万年筆を盗むのだが、その際、大量の蟹に食まれる死体を見てしまい逃げ出した。そのことが負い目となっていたのだ。一方、藤井も戦時を特攻隊員として過ごした経験を持つ。特攻隊員の藤井は、同隊の加納の不思議な魅力にひきつけられていく。藤井は特攻の前日、加納に呼び出され、崖の上へと登る。そして加納によってその崖から突き落とされ、その怪我のおかげで生き残る。藤井は、テレビ局で戦争に関するドキュメンタリーを制作することで、加納や他の戦友の死にこだわりつけていた。

清吉に取材を断られた藤井と泉は、村おこしのため、泣き御頭を観光資源にしようともくろむ村の有力者、徳一とともに、泣き御頭のもとに向く。しかしカメラを回しても、泣き御頭は泣かない。泣き御頭の横に置かれたピンには大量の蟹が群がっていた。

泣き御頭が泣かなくなったとの噂は村に広がり、自分のせいだと感じたアキラは、ピンを取り払うため、風葬場へと向かう。一方、清吉は自らが盗んだ万年筆を返すため、風葬場へと向かう。藤井は加納の影を追い求めるように、風葬場へと向かう。

アキラが風葬場へのぼり、泣き御頭の穴へと指を挿入したとき、中に潜んでいた蟹に指を挟まれ、思わず泣き御頭を振り捨てる。崖から落ちる泣き御頭を見た藤井は、受け止めようとするが間に合わず、目の前で碎けてしまう。●泣き御頭が破壊されたとの知らせは村に広がり、よそ者のせいだという噂がなされた。泉は藤井を連れ逃げるようにして村を出た。藤井の取材は結局不首尾に終わり、藤井は泉とともに本土へと帰る。◆清吉はその泣き御頭の欠片を拾い集めると、欠片を海に流し、万年筆を放り投げる。清吉のもとに、どこからか風音が聞こえてきて、テキストは幕を閉じる。

改訂版「風音」を論じた六つの先行研究のうち、花田俊典<sup>(2)</sup>、新城郁夫<sup>(3)</sup>、丸川哲史<sup>(4)</sup>、高口智史は「風音」を「水滴」と関連するテキストとして扱い、「水滴」を論じながら「風音」に接続するという方法をとった。新城郁夫、高口智史は明確に「風音」を「水滴」からの流れに位置づけ論じている。また「水滴」への直接的な言及はなものの、小林昭<sup>(6)</sup>は「深い傷や思いを戦争を知らぬ後代の人に伝えることの難しさ」を、村上陽子<sup>(7)</sup>は「風音」の「聞き取ることも、読み取ることもできないそれらの痕跡」を中心に論じ、「その呼びかけを意味の空白とともにはずらずも受け取ってしまう体験」を主題として捉えている。いずれも伝達不可能性と意味を伴わず、語ることでできないメッセージをいかに受け取るかを中心とした読解である。わずかにスーザン・ブーレイ<sup>(8)</sup>が「風音」にポストコロニアルの暴力を読み取り、立論しているが、しかしブーレイも「風音」

論を第二章として置き、第一章に「水滴」論を置いている。

改稿を唯一論じた村上陽子は初出と改訂版の違いを主に三つ指摘している。一つは表現の書き換え、特に「生物や植物に事物をたてる直喩表現」の抑制である。次に、文末表現の書き換え、「過去形で表現されていた箇所」が「現在形に改められている」。最後はストーリーの「若干の修正」である。他に、理由は不明ながら初出の「清裕」が、改訂版では「清吉」という名前に改められていることも指摘している。

ストーリーの変更に関しては大きなもので、泉の視点の削除、泣き御頭が碎け散った村の混乱の削除、結末部に清吉が泣き御頭を海に捨て去る場面が追加されている。これらの改稿を検討し、「水滴」と独立したテキストとして「風音」を位置づけるとするのが本論の目的である。

村上陽子の指摘で、一つ疑問として残されたのが主要登場人物の名前の変更、「清裕」から「清吉」への変更である。この一見無意味なように見える改稿に、単行本『水滴』への収録、ひいては芥川受賞作「水滴」に引き摺られる「風音」の姿が露出している。単行本『水滴』には「水滴」「風音」「オキナワンブックレビュー」の順に作品が収録されている。改訂版「風音」の直前に収録されている「水滴」では、まさしく「清裕」という名の人物が登場するのだ。「水滴」は主に二つの物語から成り、一つは足が膨れ夜毎そこから滴る水をすすりに来るかつての旧友に困惑する徳正の物語、平行し

て、その水を「奇跡の水」と称して村人に売りつけ、金儲けを企む「清裕」の物語である。「清裕」は「水滴」において喜劇的な役割を一身に引き受け、そのエピソードの奇天烈さと割かれた紙幅の枚数で強烈な印象を残す。ここに、初出「風音」の「清裕」は自立性を危ぶまれ、「清吉」へと書き換えられる。単行本収録の際、「風音」の前に配置された「水滴」が意識され、名前の変更が行われた。つまり「風音」が「水滴」に先行する試作として関連付けられるのは単行本収録の際なのである。この前提の上で、初出と改訂版の違いを検討することは、むしろ初出から流れ込む「風音」独自の問題意識を明らかにすることだろう。言うまでもないことだが、初出「風音」をより汚染の少ないテキストとして特権化しようというのではない（以後、初出「清裕」は「清裕（清吉）」と記す）。

初出「風音」に立ち戻ってみると同時代の問題意識が改訂版よりもはつきりと現れてくることに気がつく。初出「風音」執筆の状況を、『沖繩「戦後」ゼロ年<sup>(9)</sup>』を元に確認する。

『風音』という作品を最初に書いたのは、一九八五年です。

その年は「戦後四十年」にあたりました。この小説では沖繩戦さ中の出来事として、特攻隊の若者の死体を風葬場に置く場面を描いています。

この短い文章から執筆の際、目取真俊に「戦後四十年」が充分に

意識されており、また作中の時期も「戦後四十年」の一九八五年であること、さらにその意識のうえで、「特攻隊の若者の死体」が題材とされていることがわかる。

改訂版では作中時間が、「戦後四〇年近く」とぼかされているが、初出版でははつきり「戦後四〇年」【第七回】と明示されている。テキスト内の時間設定は一九八五年の五月後半から六月前半（六月二三日以前）で、掲載時（一九八五年一二月）とテキスト内の時間には約半年の誤差がありながらも、ほとんど共有されていることがわかる。新聞というメディアの特質もテキストに否応なくアクチュアリティを引き込んでいくだろう<sup>(10)</sup>。さらに物語を動かすきっかけとなる藤井は、八月一日に放送するドキュメンタリー製作のため、村を訪れる。それゆえ沖繩戦の節目、六月三日ではなく、アジア・太平洋戦争期の節目、八月一日により焦点が当たる。発表時期とテキストが共有する二つの時間が戦後四〇年と、その節目の八月一日であることよって「八月一日」の報道が——『沖繩タイムス』においてももちろん報道されたのだが——テキスト内に引き込まれていく。

『沖繩タイムス』において八月一日のトップは八月一二日に起きた日空ジャンボ機墜落事故の継続報道であるが、それでも「きょう40回目の終戦記念日 公式参拝に対決色も」という記事が一面に載る。夕刊では一面トップとなり、いずれもが中曽根首相による戦後初の靖国神社公式参拝を問題化している。さらに風音の連載【第

二回」が掲載された一九八五年二月二六日『沖繩タイムス』の記事に「今年の十大ニュース」があり、その中には、中曽根首相の公式参拝も含まれている。このようにして、初出「風音」は八月十五日を焦点化することによって、中曽根首相による「靖国神社公式参拝」を強く想起させる構造となっているのだ。

中曽根首相の靖国参拝の経過をまとめている『遺族の声とどく』<sup>(11)</sup>の「まえがき」から引用する。

一九八五年八月一日、中曽根首相（当時）は、それまでの政府見解（閣僚などの靖国神社公式参拝は違憲の疑いが強い）を、官房長官の私的諮問機関（閣僚の靖国神社公式参拝に関する懇談会、通称、「靖国懇」）の答申を受けて、変更し、戦後初めて的首相としての靖国神社公式参拝を強行した。中曽根は、この答申をうける以前の七月に軽井沢の自民党議員セミナーで、「〔国家機関が靖国に力を入れなければ〕だれが国に命を捧げるか」と発言していた。靖国と国家神道によって再び軍国主義を支えようという、明確な政治的デモンストレーションであった。

靖国神社は、左右問わず多くの論者が述べるように、軍人・軍属の戦死者の顕彰を主たる機能として有している。しかし、公式参拝に拘る自民党が端無くも示しているように靖国神社の機能は、国家

が公的に称えるのでなければ発動しない。高橋哲哉は以下のように分析する。

大日本帝国が天皇の神社・靖国を特権化し、その祭祀によって軍人軍属の戦死者を「英霊」として顕彰し続けたのは、それによって遺族の不満をなだめ、その不満の矛先が決して国家へと向かうことのないようにすると同時に、何よりも軍人軍属の戦死者に最高の榮譽を付与することによって、「君国のために死すること」を願って彼らに続く兵士たちを調達するためであった。そしてその際、戦死者であれば一平卒でも「おまいりして」くださる、「ほめて」くださるといふ「お天子様」の「ありがたさ」、「もったいなさ」が絶大な威力を発揮した。<sup>(12)</sup>

戦前は「お天子様」、そしてその機能が瓦解した戦後においては、代わって国家が顕彰を行わなければ、靖国神社は機能を果たさない。中曽根首相は「〔国家機関が靖国に力を入れなければ〕だれが国に命を捧げるか」と述べたが、こうした発言から公式参拝は、靖国の顕彰機能を再び作動させ、国家に殉ずるといふ名目で死へと向かわせるものとしてとらえることができる。しかし一方、これとは別の次元で、追悼を読むことも可能だ。つまり国家に命を捧げたものに対して、国家こそが悼まなければ、彼らの死が無駄となる、そのための公式参拝、という理屈である。実際顕彰に基づく靖国参拝の理

屈は徐々にその重点を追悼へと移していった。例えば二〇〇一年小泉首相（当時）が、鹿児島県知覧の特攻平和館に展示された遺書を読み、「自然な感情」によって戦後二度目の「公式参拝」に踏み切った、と述べるとき、顕彰と追悼の複雑な関係が露呈する。ここには「自然な感情」≡追悼の気持ち、≡「公式参拝」≡顕彰的な行為によって表されている。つまり追悼のあり方として、国による顕彰という手段がとられる必要があるということだ。追悼と顕彰とのからみ合いはそのジレンマが遺族を通して現れてくる。

戦時体験の語りがたさを訴え続け、自らを戦中派として位置づけた「わだつみ会」会員の安田均は、遺族の悲しみをうけとめた上で、「八月十五日に行われる政府主催の戦没者追悼式と、靖国神社国家管理の問題に関して、どうして「わだつみ会」は反対するのか」という遺族の訴えに応えようとする。

靖国神社の国家護持（国営）法案に反対する立場は、いまままざまいくつかある。（略）

だが、私がいまこの稿を、二人のご遺族、母親の報告から書きはじめた第一の理由は、すでにふれたとおり、遺族こそ当の問題の当事者であると考えたからであり、当事者である遺族に訴えるため、この小文を書くとき最初にも断り書きしてきた。それはまた「ただ国のためのぎせいの死を、このままほうむってしまいたくないという願い」といわれる。この母親の哀切な願

いにこたえようとせず、かえってその悲願に便乗して、裏に「政治」的意図を秘匿して行動するような人間を、保守派であろうと進歩派であろうと、私はゆるすことができないからだ。<sup>(14)</sup>

遺族において、死の意味付与、顕彰はまさしく「哀切な願い」であり哀悼であり、それは国家における政治とは違った次元で、切望されている。国家は「政治」的意図<sup>(15)</sup>から「自然な感情」を横領し、遺族感情と「政治」的意図<sup>(16)</sup>とを混同し、盾にしてきたともいえる。

この顕彰と追悼の関係は、三島由紀夫が「英霊の聲」<sup>(15)</sup>で響かせた「聲」、「などですめるぎは人間となりたまいし」を引き出す。それは天皇に意味が、天皇が人となることによって無意味化された恨みだった。三島由紀夫の平板な英霊表彰は批判されるべきだと思うが、とにかく公式参拝の正当化は、遺族感情と国家の「政治」的意図<sup>(16)</sup>とが結び付けられ、戦前の天皇が、戦後に国家と置き換えられ、英霊の死を再び有意味化することにあると言えよう。その中でも、国家に殉じた死か、単なる無駄死にか、俗に言う犬死論争と呼ばれる議論からもわかるように、特攻隊の死が靖国参拝の背景に賭けられている。「風音」は「特攻隊員」の骨を扱うことで、「戦後四〇年」の靖国参拝における追悼の政治を強く問題化したのだった。

追悼の政治は根深くナショナリズムに結びつく。GHQは布令「公葬等について」<sup>(16)</sup>によって、国家による弔いを制限するが、それは軍

国主義の復古を警戒したためであった。上杉和央<sup>(17)</sup>が指摘するように、一九五二年五月二日、新宿御苑にて行われた第一回全国戦没者追悼式は、四月二八日のサンフランシスコ平和条約発効によって主権を回復した日本が、まずもって実地した行事の一つであり、そこには日本の新たな一步を踏み出す際の紐帯として、戦没者追悼に伴うアイデンティティ創出が期待されていた。つまりGHQも日本も戦没者の追悼儀礼が、国民を結びつけるものだとして正しく認識していたのだ。そして、八十年代における八月一日の整備へとつながる。

佐藤卓巳<sup>(18)</sup>によれば一九八〇年代、「政治・経済の国際化の波」のため「歴史記念日を利用した国民統合のアイデンティティの再編」が、日本に必要とされていた。江藤淳も関わる「戦没者追悼の日に関する懇談会」の報告書に従い、一九八一年に八月一日の正式名称を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とし、そして「玉韻放送の終戦体験」と「お盆」とが八月一日に重ねあわされることで、八月一日は「国民」の記念日となる。これらは靖国参拝を準備するためのもので、その記念日が「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とされたのは、まさしく「追悼」が政治的な要素であることを証している。このようにして国家は、生者と死者との接合を図り追悼の政治を行う。自らを追悼する「主体」とすることによって、その姿を立ち上げるのだ。

さらに江藤淳の『諸君！』に一九八六年四月に掲載された「生者の視線と死者の視線」という論考に注目したい。ここで取り上げる

のは江藤淳が一九八四年七月に設置された「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇親会」の委員で、中曽根首相の公式参拝を達成するための議論を重ねていたためであり、さらに本論にとり重要なのは、この論考が一九八六年に発表され、「日本」の「追悼」のあり方に言及しているということだ。靖国神社公式参拝が記事となった八月一日の一面トップは日航ジャンボ墜落事故の続報であると述べたが、この事故を傍証として引きながら、江藤淳は「日本」の「追悼」のあり方について述べていく。

飛行機事故が起きた時に、日本では遺体を断片に至るまで収集して、弔わなければ、手厚く葬ったことにならない。今日に至るまで、南溟の果てにまで遺骨収集団を派遣し、戦死者の骨を一つでも二つでも余計に拾おうとするのが日本人である。一方、アメリカではこんどのスペースシャトルの事故でも、遺体を引き上げようという気配すら全くない。キリスト教の教義では死んでしまえば、神の御許に行くのであって、日本人の言う意味での靈魂というものの存在は認めないのです。したがって当然生者と死者との関係が違う。

江藤淳は、「遺体を断片に至るまで収集」しなければ「手厚く葬ったことにならない」と指摘する。「靖国参拝」の議論が、江藤淳により「飛行機事故」、一九八五年八月一二日に起きた「日航ジャン

ボ墜落事故」と結び付けられることで「追悼」をめぐる問題が大きく浮かびあがる。

一九八五年八月一二日に起きた日航ジャンボ墜落事故は航空史上最大の死者数を記録した。平時におけるその大量の死は、戦時を想起させるに十分だったろう。朝日新聞社会部が編んだ『日航ジャンボ機墜落——朝日新聞の24時<sup>(19)</sup>』には、その数に抗するかのよう<sup>(19)</sup>に二四ページに渡り犠牲者の名前、年齢、肩書き、住所、旅行目的が書き添えられた。これらの情報は、一人一人の背後にある家族や人生を、そして失われたものの大きさを想起させ、またリストに連ねられた名前の並びは、逆説的に再び圧倒的な量の死へ、それらがすべて失われたという絶句するしかない状況へと誘う。

江藤淳はこの死を拒否する。このとき根拠となるのが「死者との共生感」である。

日本人が風景を認識する時には、単なる客観的な自然の形状として認識するのではなくて、その風景を見ている自分たち生者の視線と交錯する死者の視線も同時に認識しているのです。

(略) 日本人は身边囁目の風景を眺めている時でも、同じ風景を見ているもう一つの見えない視線、つまり死者たちの視線を同時に感得することによって、そこからある喜びと安らぎを汲み取り、死者たちに対する呼びかけの気持ちを通わせようとする。(略)

江藤淳は「死者のことを考えなくなってしまえば、日本の文化は滅び」、「死者と共に生きるといことがなければ、われわれは生きていくという感覚を持ってない」と述べている。ここで「日本」が死者により規定され、またその生が死者に依存していることに注目したい。「死者たちの視線を同時に感得」し「喜びと安らぎを汲み取り、死者たちに対する呼びかけの気持ちを通わせようとする」、「こう述べる時、確かに失われた「死者」はいなくなる。しかし「生者」は「死者」によって生を根拠づけらると同時に規定されることになる。さらに、その共生感のため江藤淳がなおも靖国神社に拘る時、死者は平等でなくなる。高橋哲哉<sup>(20)</sup>が江藤淳を批判して述べているように、以上のような「死者の共生感」によっても、それが「靖国」という形をとらなければならぬ」必然性がない。靖国に祀られている死者は特に政府が公的に参拝しなければならぬが、日航ジャンボの死者にはその必要がないと言ってしまうことになり、江藤淳はその身振りにおいて、死者に、「意味がある」「より意味がある」と等級を割り振ってしまった。そもそも意味を与えるという行為、それ自体、格付けを内包しているのだが、「日本」を体現するときの昭和天皇の詔勅を引きながら、その身振りを正当化しようとする行為は、それは、人には死者の顕彰は不可能だということを示すするばかりとなる。正当化には、「日本国民」が戦死者に、負い目をもつことが要求される。日航ジャンボの死者に負い目はないが、「英霊」には負い目があるといわなければならない。ここに「死者」



と「生者」の負い目による特別なつながりがつくられる。

江藤淳が述べた顕彰に絡む追悼には二つの問題がはらまれている。一つが江藤淳や中曽根、小泉首相、そして三島由紀夫に代表されるような、死者を生者の生に結びつけること。そして、もう一つが日空ジャンボに代表されるような不条理に死んだ死者を意味づけすること。初出から改訂版に至るまで「風音」はこの二つの問題に——重点を移しながらも——一貫して対峙している。

靖国参拝を背景とした時代の中に「風音」を置きなおすことで、初出「風音」の問題意識が明らかになる。「戦後四〇年」と明記された初出から、「戦後四〇年くらい」と表記は変えられているものの、改訂版にもその問題は引き継がれている。改稿過程を検討していく中で、死者を意味づけ「聲」を聞く、言わば靖国の言説から「風音」がいかに対峙しているか、またその対峙が、初出から改訂版への過程で力点を移動させながらも、引き継がれていることが明らかになるだろう。

## ◆二 改稿

今一度確認しておくが、村上陽子の指摘する改稿は「生物や植物に事物をたとえる直喩表現」の書き改め。文末表現の書き換え。ストーリーの「修正」である。

本論ではさらに「アキラの造型の変化」、「性愛的比喩の削除」、

「清裕（清吉）と藤井の距離の変化」「村の描写の変化」を指摘することができる和思考。

まず村上の指摘する「生物や植物に事物をたとえる直喩表現」から、その効果として、森の生物と登場人物が切り離され、森の生物の外在化がなされていることを確認する。なお、初出は『沖縄タイムス』から引用し、改訂版は単行本『水滴』に収録されている「風音」から引用している。改訂版に付されたページ数は単行本に対応している。

### ○生物の比喩

#### 【第三回】

目を閉じて体内を流れる川の音を聞いた。濁った血が洪水のように烈しく流れ、柔らかな血管を限界まで膨張させる。その中を無数のテラピアが鋭い歯を剥き出しにして泳いでいる。一匹がアキラに気づいた。一つの巨大な塊になったテラピアの群れが、鱗を軋ませて突進してくる。アキラの喉から鋭い叫び声が発せられた。海から吹きつけた突風が硬直した下肢や背中を襲い、髪の毛を逆立てる。昼顔の葉が白く吹きちぎられ、ざわめく葉ずれの中に不意にあのものがなしい音が聞こえてきた。アキラは目を開いた。

静かな憎しみを秘めてテラピアの目がアキラを見つめてい

た。全身に稲妻が走った。アキラは残った距離を一気に登りつめた。

改訂版【p57～p58】

目を閉じて体内を流れる川の音を聞いた。血が洪水のように激しく流れ、柔らかな血管を膨張させる。ただ、その血は腕にだけは流れてこなかった。昼顔のつるをつかんでいた右手の握力がなくなり、体が震えアキラは短い叫びを発した。ふいに海から風が吹いた。風は硬直したアキラの背中を襲い、髪の毛を逆立てた。昼顔の葉裏が返り、ざわめく葉ずれの中にあのものがなしい音が意外な近さから聞こえた。目を開くとテラピアの目がアキラを見つめている。全身が鳥肌立ち、アキラは残った距離を一気に登りつめた。

初出ではアキラの体内に潜むテラピアと、「静かな憎しみを」秘めたビンの中の「テラピアの目」が、アキラを脅かすものであることが強調される。

一方改訂版ではテラピアの描写は最小限に抑えられ、「血」や「腕」「右手の握力」など肉体的な描写が前景化し、自然との格闘によって、風葬場に登るアキラが力強く表現されている。

ここではテラピアの描写が削除されているが、初出においてテラ

ピアは内部（体内）にありながら、同時にガラスを隔てた外部（ビン）だった。さらにその内部のテラピアに脅かされ、テラピアはアキラがコントロールすることのできないものとして強調される。

一方改訂版からは内部のテラピアが排除され、あくまでテラピアは外部からアキラを脅かすものとしてある。改訂版で、はっきりとテラピアが外在化されているが、初出ではテラピアとアキラとが結び付けられている。

【第五回】

海綿のように思い疲労の灰汁を吸った腕がビンから滑り落ち、反動で縁石からかした瓶が砂の上に斜めに落ちて止まった。テラピアの尾が水面を突き破り、飛び散った水滴が頭蓋骨を濡らす。アキラの目に、鋭いカギ形の爪が青い空にくっきりと一本の曲線を刻み込むのが見えた。

固い毛の生えた一本の頭蓋骨の眼窩から現われると、目の縁の骨をカリカリと引っ掻いた。黒い影が砂の上を走り過ぎる。アキラは、産卵を終えて力尽き、急流を押し流される魚のように、昼顔の垂直の流れに巻き込まれた。

年老いた獣の臭いがする榕樹の根が頬をかすめ、アキラの体をなぶる。細く消えてゆく意識の火を揺らめかせて風音がかすかに聞こえた。それは何かを必死で伝えようとしている

のだが、適わない苦しさで悲しさを秘めているような気がした。アキラはその秘められた声を聞きとろうとした。しかし、無意識のうちに動かした手足にからみつくつるの千切れる音に邪魔されてできなかった。やがてその音も聞こえなくなった。

#### 改訂版【p60】

ぐったり深まる疲労に抗い、血の気を失って感覚のない指をどうにか離し終えた時、反動で縁石からかしいだビンが頭蓋骨に寄りかかるようにして止まった。テラピアの尾が水面を打ち、飛び散った水滴が頭蓋骨を濡らす。滴の流れ落ちた眼鏡から鋭いかギ爪を持った一本の脚が現われ、目の縁をカリカリと引つ掻いた。青紫色のハサミを胸の前で構えた蟹が半身を出して突き出た目を動かしている。蟹は一匹ではなかった。岩の奥から姿を現した数匹の蟹が、紫や朱色のハサミを上下させながらゆつくりとアキラに近づいてくる。突然、一匹が砂の上を駆け寄ってきた。反射的に縁石から離れようとして、アキラは垂直に垂れる昼顔のつるに巻き込まれるように落下した。

改訂版では、初出に明言されない蟹の存在が強調される。

初出では新聞連載の際、絵が付されており、そのおかげで蟹であることが予測される。文章だけでは非常に読み取りづらい。

風葬場から落ちる描写は、初出に「産卵を終えて力尽き、急流を押し流される魚のように」と人為の及ばない自然の流れによるものとして描写されるのに対し、改訂版では蟹に反応して落ちていく。

先ほど見たテラピアと同様に、蟹がはっきり外部のものとして描写されている。さらに初出でアキラは「魚のように落ち」「無意識のうちに手足を動か」すが、改訂版では蟹を避けようとして「反射的に」「離れよう」として落ちていく。こうして見ていくと、初出と改訂版の違いは特にテラピアや蟹、といった生き物たちが、はっきりと外在化しているか否かに違いがある。初出では「急流に押し流される」や「無意識」などの表現がなされ、自分で自分をどうすることもできない様が強調されている。

初出では、生物に例える比喻が多用されているため、その区別が曖昧になる。その点は、次の森の描写からも証明できる。

#### 【第二回】

だがすぐに力いっぱいその白い肉体を突き飛ばすと、肺の奥から渦巻いてくる風を吐き出しながら、足指の爪がさけるまですりつづけた。あの音が再び聞こえていた。

「救ち、救ちとらせ…」

息せきあって走りながら、清裕は切れ切れの呻き声を漏らした。だが、音はいっそう鮮やかに清裕の頭蓋の奥深く入っていくのだった。

#### 改訂版【p92】

だが、すぐにやせた体を突きとばすと、清吉は集落の方に走りつづけた。

両側をガードレールに守られた新道に出て、家並みの明かりが見える所まできて清吉は足を止め、アスファルトにしやがみこんだ。五分ほどそうして呼吸を整えていたが、藤井は追って来なかった。立ち上がってゆつくりと歩きしばらく行った時、森の木々がかすかにざわめき、海の臭いのする温かい風が首筋をなでた。頭上を螢火が追い越していく。弱々しい風の音は螢火とともに消えた。

風音が、改訂版では逃れ得るものとして描かれている。「両側をガードレールに守られた」「アスファルト」の新道に出さえずれば後は痕跡を残すのみだ。

一方初出では、清裕（清吉）の罪の意識を誘発し、「頭蓋の奥深く」にまで追ってくるものとして描かれる。このように清裕（清吉）の内部のものとして記述される風音は、改訂版では「弱々しい風の

音は螢火とともに消えた」と、自分の外のものとして描写される。この点は先ほど述べたテラピアの描写とつながる。つまり、初出において、比喩による蟹やテラピア、風音や森との結びつきが強調されているのに対し、改訂版では比喩表現を登場人物の身体からそぎ落とすことで、はつきりそれらと区別されているのだ。

#### ○性愛的な比喩／アキラの造形の変化

初出から改訂版では明らかに性愛的な比喩が削除されている。とくにアキラが泣き御頭の穴に指を挿入する場面は顕著だ。

#### 【第三六回】

アキラは夢見るように微笑むと、滑らかな曲線を見せている泣き御頭に手を伸ばし、その傍らに散らばっている骨は軍服、軍靴に目をやった。懐かしい気持ちがあった。ここに横たわったまま、四十年の間、はるか北の方の海を眺めつづけてきたこの白骨が、生まれてくる前からの知り合いのように思えた。やさしくいたわるように泣き御頭の頭頂部に美しく反った柔らかな手をあてた。冷たい感触が指先に伝わった。潮風に洗われてなめらかに風化した骨の表面を何かに操られるように指先が円を描いて滑った。

アキラは左のこめかみに空いている小さな穴を見た。指先

はその穴を中心にゆっくり回転し、渦を巻いて、迷いもなく汚れを知らない幼い性器のようなその中に吸い込まれていった。次の瞬間、アキラはマングローブの密林に潜むものすべてを脅かすような叫びを上げて我に返った。振り回した指に食いついている頭蓋骨の眼窩から三日月状の鋭い爪がのぞいているのが見えた。

アキラはきつく閉まった頭蓋骨を海の彼方に投げすてるように渾身の力を振りしぼって腕を振りおろした。右の人差し指の肉が爪ともども噛み切られた。泣き御頭は真っ直ぐに崖の方に落下していった。あのものがなしい風音を残して。

痛みをこらえるアキラの閉ざされた目に、闇の中に砕け散る泣き御頭の破片が、音もなく広がる白い花火のように鮮やかに見えた。

#### 改訂版 【p118～p119】

アキラは泣き御頭に手を伸ばし、その傍らに散らばっている骨や軍服、軍靴に目をやった。恐怖心はなかった。むしろ、ここに横たわったまま、四十年の間はるか北の海を眺めつづけてきた骨に不思議な懐かしい気持ちさえを起こった。頭頂部にそっと触れると冷たい感触が指先に伝わる。潮風に洗われてなめらかに風化した骨の表面をなでていて指先がく

ぼみに触れた。アキラは左のこめかみに空いている穴を見た。小さな穴だった。縁に指を這わせ、人差し指を入れると先の方が入っただけだった。ふと、アキラは御頭の泣く理由が分かった。小さな穴を吹き抜ける風の音。二つの眼窩から吹き込み、頭蓋の中で反響し、男の命を奪ったこめかみの傷口から漏れる風の音が、鳴き声の正体だった。アキラは両手で御頭を持ち上げた。そして、砂の上にそっとおろそうとした時、鋭い歯がいきなりアキラの指を噛んだ。アキラは叫びを上げて、腕を振り回した。眼窩からのぞいた蟹の爪が指をはさんでいる。渾身の力で投げ捨てると、人差し指の肉が爪ともども噛み切られた。御頭は真っ直ぐに崖の方に落下していく。あのものがなしい風音が遠ざかる。闇の中に砕け散る破片が白い花火のように広がる。

特に目立つのは「幼い性器」の削除である。代わりに改訂版では、「御頭の泣く理由が分かった」とする場面が描写されている。

初出版では「夢見るように」や「吸い込まれていった」、そして「我に返った」など正常な判断力を失っていることが強調され、また「やさしくいたわるように」や「泣き御頭の頭頂部に美しく反った」「柔らかな手をあてた」と、愛撫の比喩が多用される。

改訂版ではそのような比喩や表現が削除され「御頭の泣く理由」

を推測するなど、アキラはあくまで理知的である。初出ではあくまでアキラの没我の状態が強調されているのだ。

初出に多用されるこのような表現は、先ほどみた「産卵を終えて力尽き、急流を押し流される魚のように」と対応する。アキラがまるで自分の意思でなくなるとかに操られるような描写の削除は、初出と改訂版におけるアキラの造形の変化とも重なっている。

### 【第三一回】

理科が得意で、いつも物差しを持ち歩いて物の長さを測っているヒトシが、自分の推理を得意に思いながらも、こういう言い方が緊迫した場にふさわしくないのでは、と気遣うように皆の顔をうかがった。

ヒトシの説明は少しもアキラの不安の芽の生長を妨げなかった。一晩もたてば生茂った不安のつる草にまきつけられ、窒息死してしまいきそうだった。

### 改訂版【p111】

理科の得意なヒトシがそう言うと、何名かがうなずいてアキラを見た。アキラは自分に責任が向けられたことが腹立たしかったが、実際そうかもしれないという気もして反論でき

なかった。

初出でアキラは、泣き御頭が泣かなくなったと聞いたとき、怯えるだけだが、改訂版では非難するような仲間の目に反撥する余裕がある。アキラの造形が初出は弱々しく、改訂版では行動の描写や仲間への反発の描写などで、アキラの印象が変化している。

### 【第三五回】

風は無かったが澄み切った夜気が気持ちよかった。空は満ちた月の明かりで数えるくらいしか星がなかった。梅雨が明けようとしていた。イジユの花の匂いが夢魔の体臭のように匂った。はかり知れない繁殖力をもった森の木々が侵入してくるのを防ぐ護符のように道の両側に続いていたガードレールが切れ、そこから入神川の河口につながる細い径が伸びていた。

アキラは石灰岩の白い径に足を降ろした。まるで誰かが掃き清めたように柔らかな石灰岩の粉末が、土踏まずの敏感な皮膚をいたわるように受け止めた。赤ん坊の頭くらいの小さな頭蓋骨がアキラの前を歩いていた。アキラはそれが白い巻貝を背負ったヤドカリであることを知っていた。はるか以前にもこのヤドカリを見た記憶があったのだ。

森の木々と川岸のマングローブが両側から枝を伸ばしトネルのようになつた白い径をアキラはヤドカリに導かれるようにして歩きつづけた。やがて、ヤドカリはマングローブの密林に姿を消した。同時にそこからひとつの螢火が現れ、気の遠くなるようなはかない尾を引いて明滅しながらアキラのまわりを一廻りすると、昼顔の流れを上昇し、青白くほんやり光っている二つの塊の間に消えていった。

アキラはその螢火の軌跡を辿って、昼顔の葉群れに歩み寄ると、何か不思議な力に包まれているように軽々と崖を登っていった。

改訂版【p117～p118】

風は無いが澄み切った夜気が気持ちよかつた。空は満ちた月の明かりで星も数えるくらいしかない。イジユの花が匂っている。道の両側につづく小高い森の奥で走り回る何かの足音と虫の音が絶え間なく聞こえてくる。木々が侵入してくるのを防ぐ護符のように道の両側に続いていたガードレールが切れ、そこから入神川の河口につながる細い径が伸びていた。まるで誰かが掃き清めたように柔らかな石灰岩の粉末がなめらかに積もっているその径にアキラは足を降ろした。赤ん坊の頭くらしいの小さな頭蓋骨がアキラの前を歩いている。ア

キラはそれが白い巻貝を背負ったヤドカリであることを知っていた。はるか以前にもこのヤドカリを見た記憶があった。

森の木々と川岸のマングローブが両側から枝を伸ばしトネルのようになつた白い径をアキラはヤドカリに導かれるようにして歩きつづけた。やがて、ヤドカリはマングローブの林に姿を消した。そこからひとつの螢火が現れ、はかない尾を引いて明滅しながらアキラのまわりをひと回りすると、昼顔の流れを上昇し、青白くほんやり光っている二つの塊の間に消えていく。

アキラは昼顔の葉群れに歩み寄ると、軽々と崖を登っていった。

改訂版において、「夢魔の体臭」という語が削られている。崖を上る箇所の改稿では、初出から「何か不思議な力に包まれているように」という語も削られている。

初出のアキラは「まるで誰かが掃き清めたように柔らかな石灰岩の粉末が」、自分の「土踏まずの敏感な皮膚をいたわるように受け止めた」と感じる。全てが自分を誘い、受け止めるように思われる。森は「夢魔の体臭のよう」であり、道は「いたわるように受け止め」てくれる。そして「何か不思議な力に包まれているように軽々と崖を登っていい」。出会うのは「生まれてくる前から知り合いのように思え」、「幼い性器」をさらす泣き御頭である。「何かに操られる

ように「小さな穴」へと誘われる。

改訂版ではそのような表現が抑制され、理知的なアキラの姿が浮かび上がる。

改訂版でははっきりとセラピアのピンを取り除くために向かう。初出のアキラが誘われるままに、泣き御頭の穴に向かうのとは反対に、改訂版のアキラは泣き御頭を対象化している。改訂版からはアキラが、没我していくような表現が削除されているのだ。

ここでもさきほど述べたのと同じような操作が行なわれている。つまり性愛的な比喩が削除されることにより、アキラと泣き御頭が区別され、その距離がはっきりと示されているのだ。

#### ○藤井との距離

初出から改訂版に至る過程で変化したものひとつに、藤井と清吉の距離がある。

#### 【第二二回】

ふたりはわずかな距離を置いて互いに見つめあった。清裕は乱暴な言葉を吐きながらも、藤井に対して他の本土人のように憎めない何かを感じて戸惑った。いつかこの男とどこかであったような…そういう気がしてならなかった。

#### 改訂版【p91】

ふたりはわずかな距離を置いて互いに見つめあった。戸惑った表情の藤井が川の方に目をそらすのを見ながら、清吉は首のてのひらで拭った。自分の言葉を無視して取材をすすめるなら、鎌で威すくらいはやるつもりだった。

初出では清裕（清吉）が藤井に対して悪感情を抱いていないことを示す文章が置かれている。改訂版でその記述は削除され、清吉の藤井に対する警戒心が強調される。初出と改訂版とでは藤井の立ち位置が微妙に異なってくる。さらに改訂版で付け加えられた清吉の視点である。

#### 改訂版【p126】

清吉はアキラを促し、集落の方に歩いた。吊り橋を渡る時、川の中に胸まで浸かり目を閉じて立っている藤井を見た。溺れるほどの深さではなかった。溺れようと知ったことでもなかった。

テキスト全体で大きな分量を占めているわけではないが、「藤井に対して他の本土人のように憎めない何かを感じて戸惑った」とい



う記述が削除され、さらに「知ったことでもなかった」という記述が追加されている。この二つの変更により、藤井と清吉との間に大きな距離が介在することになる。加えて、「第三九回」において藤井の「加納」という呼びかけに、「藤井」と清裕（清吉）が応える。ここまでは改訂版と共通しているのだが、初出ではさらに藤井が「清裕」と呼び返すのだ。ここは改訂版で削除されている。

初出において清裕（清吉）は藤井に対してそこまで悪感情を抱いてはいないことからこの呼びかけの削除は決定的であると考えられる。初出では藤井と清吉との間につながりが生じるかのように見えるが、改訂版ではむしろ距離がはつきりと強調されている。

#### ○改稿まとめ

セラピアの改稿で確認したことだが、初出ではセラピアがアキラの内部に巣食うものであるとされるのに対し、改訂版では、はっきりと外在化されている。生物や植物に例える比喩が削除されているのも、まさしく森や自然を他者として描写するという問題意識から出ているのだろう。また性的な比喩の削除であるが、まさしくこの点において、他者の区別を失う性的な比喩は削除されなければならなかった。改訂版では性的な表現が削除されることによって、特にアキラの、他者に没入する状態が回避されている。

以上のことから、改稿の効果は、主に他者との区別をはっきりさせるということができないのではないか。つまり生き物の比喩が抑制

されることにより、生き物と比喩されたものが重ね合わされない。性的な比喩が抑制されることにより、主体と客体との混濁を許さない。藤井と清吉との距離が強調されることで、他者理解への容易ならざるものを教える。

初出の清裕（清吉）が泣き御頭と最後にかかわる場面「三六回」では、自らの生を意味づけていた泣き御頭の廃棄に「顔を歪めて目を見開いている」自分を、「嘲笑うかのよう」に、セラピアが生命を誇示し、「腐った水を清らかな砂の上に跳ね散らす。清裕（清吉）が泣き御頭に抱いていた怯えや恐れがここで「嘲笑」われ、セラピアはただ生き続けるのだ。ここにおいて清裕（清吉）は自らの負目、生が、死者とはなんの関係のないことを知る。一方、藤井は特攻隊で死の意味づけの無意味さを知り、そして生き残ったことを、「加納によって生かされた」と意味づけることの無意味さを知る。初出は死者による生の意味づけの失敗を自覚する場面で終えられている。

改訂版には泣き御頭の吊いの場面が追加される。

これは改訂版において吊いの観点、つまり死者を死者として、断絶へ送るということを、前景化したためだと考えるが、詳細は別稿を用意したい。今回は改訂版に付け加えられた最後の場面に触れることで、その一端を紹介したい。

改訂版では、清吉が泣き御頭と万年筆を海に放る場面が付け加わることによって、記憶、埋葬の問題がクローズアップされてくる。

初出においては、泣き御頭への負い目がテラピアに嘲笑されるところで清裕（清吉）の場面は終わっていたが、改訂版は埋葬を終えた上で、死者と取り結ばれる関係が示唆されている。<sup>(22)</sup>

清吉は破片となった泣き御頭を海にまき、自らの生をとらえていた万年筆を放る。泣き御頭はここではじめて埋葬を完了し、風音が聞こえてくる。

風音は「海からの風」や「透明な鳥」や「萤火」などと共に現れ、泣く。これは初出から改訂版において比喩表現の抑制により、外在化されたものだった。清吉が泣き御頭を海に流す。そのとき風音は、外部から訪れる所有できないものとして、聞こえてくるのだ。

ふと、清吉は立ち止まりあたりを見回した。鋭い刺を持ったアダンの葉先が揺れている。青みを増した海に、リーフに砕ける波が白く輝く。吹き寄せる風につけて響くその波の音と遠くこだまするセミの声の間に、あの音が聞こえていた。細く、低く、途切れそうになりながらも、海からの風につけて、風音は清吉の胸の奥の穴に流れ込んでいく。波の音が高くなった。しかし、風音は消えることがなかった。

風音は「海からの風につけて」、「胸の奥の穴に流れ込んでいく」もはや清吉に所有できず、ただ聞くことしかできない、外から流れ込んでくるものとしてある。弔われることで、泣き御頭は死者とな

り、ここで「泣き御頭」という名、意味付けからの解放が果たされ、死者の世界と断絶するのだ。

死者を、他者として遇し、断絶を思い知り、自らに取り込むことをしない。このようにして、靖国神社、特攻隊員、英霊、「死者との共生感」、「聲」に対峙する風音を、弔いという観点から読むことができる。

初出においては、死者による生者の生の規定、生の意味づけの方に重点が置かれていた。その生の規定は性愛的欲望に比喩され、最終的に失敗と禁止に陥った。一方、改訂版ではさらに死者の他者性が強調され、その他者を所有できないものとして改稿がなされていた。もちろん以上のモチーフが初出と改訂版とに截然と区別できるわけではない。モチーフは改稿によって、生者の意味づけの物語から、死者（他者）に対する弔いの物語へと微妙に重点をずらしながらも還流しているのだ。

### ◆三 何度も呼び出される「風音」

以上、改稿の過程を追ってきたが、しかし実は「風音」というテクストは改稿のみを通して呼び出されているわけではない。以下、対応年譜を提示する。

・一九八五年八月一五日 中曽根首相の靖国参拝

・一九八五年一月二五日 『沖繩タイムス』紙上において「風音」連載

・一九八六年二月五日 「風音」連載終了

・一九九五年九月四日 沖繩米兵少女暴行事件

・一九九五年十月二一日 県民総決起大会（反基地感情高まる）

・一九九七年上期 目取真俊「水滴」で芥川賞受賞

・一九九七年八月 短編集『水滴』改訂版「風音」が収録。

・二〇〇一年八月一五日 小泉首相、靖国神社参拝。公式参拝は戦後二度目。以後も公式参拝ではないものの、二〇〇二年、二〇〇三年、二〇〇四年、二〇〇五年と参拝を続けている。

・二〇〇四年四月 『風音 The Crying Wind』。「風音」の長編化。

・二〇〇五年七月 『沖繩「戦後」ゼロ年』。「風音」、特攻隊員、靖国参拝への言及。

・二〇〇六年八月一五日 小泉首相、任期の最後に靖国参拝。

二〇〇五年七月に出た『沖繩「戦後」ゼロ年』では、直接的に「風音」が特攻隊員とのかかわりにおいて言及されている。まず「父母の話」としての特攻、そして「水漬く屍」という歌を具体的な死体の腐敗や損壊をもとに否定している。最後に、遺骨収集の問題。また鹿児島県知覧の特攻平和館にいったときのこと言及されているが、これは小泉首相（当時）が、そこに展示された遺書を読み「自然な感情」によって「公式参拝」に踏み切ったことを強く意識して

いるかと思われる。このようにして「風音」は戦後のありようが問題化される際に、目取真俊によって何度も召喚されてきた。そして遂にはテキスト上で、泣き御頭は固定化してしまう。『風音 The Crying Wind』では泣き御頭が破壊されない。

本論では、初出から改訂版に至る過程を、生者による死者の意味付けから、生者と死者との「断絶」を前景化する過程だと論じてきた。靖国神社、また「死者との共生感」という言説や、「聲」を聞いてしまうものたちへ、はっきりと対峙するようにテキストは構成されていた。しかし、初出の「意味づけ」にせよ、改訂版の「断絶」にせよ、それらのモチーフは最終的に泣き御頭が死者の世界へと完全に移行しなければ成り立たない。

泣き御頭が最後の長編化によって、なぜ残されなければならないのか。これはもちろん『風音 The Crying Wind』を詳細に論じるしか方法がないが、最後に初出から改訂版に至る「村」の改稿を、そして『風音 The Crying Wind』の風音の描写をみることで、その足掛かりを作りたい。

#### ○村の描写

初出では、村の描写が多くなされるのに対し、改訂版では削られている。村の位置づけも初出と改訂版では微妙に異なっている。

【第一三回】

それがいつの間にか、そういう暗黙の禁忌が徐々に崩れはじめていた。清裕は薄々気づいていながらもその事実を直視しようとしなかった自分を嘲笑った。

改訂版【p75】

墓を指差すことさえ良くないことが起こると、禁じられている村の中では、風葬場の跡で海を見続けている泣き御頭を正視することも避ける人もいた。それを見せ物にしようというのは初めてだった。

改訂版では泣き御頭がどのように畏れられていたか例をあげ、「見せ物にしよう」ということがまったく「初めて」であることを強調し、逆説的に禁忌がいままで村を縛っていたことを述べる。

しかし初出の方では、その「禁忌が徐々に崩れはじめて」いることを語るので、泣き御頭に対する村人の態度はこの時点においてすでに低いのであろうと推測できる。初出のそのような村のありさまは【第三八回】の描写へと導かれている。ちなみにこの【第三八回】は改訂版においてすべて削除された。

【第三八回】

「早く引き揚げた方がいいかもしれない」  
泉はそれまで鼻であしらっていた村人たちの迷信が急に様相を変え始めたような気がして、そういう自分を嘲笑しようにも隠しようのない恐怖が体に強張るのを感じた。

急いで荷物の整理を済ませると、村のタクシー会社に電話をかけたが、にべもなく断られた。泉は焦ってすぐに隣町からタクシーを呼ぶと、いくら起こしてもぐったりして目を覚まさない藤井に衣服を着けさせた。タクシーが来るまでの一時間の間に、着替えたばかりのワイシャツは粘りつく汗でぐっしり濡れていた。

泉は藤井を背中に担いで、タクシーに乗せると、大急ぎでカメラや機材をトランクに運びこんだ。そして強過ぎる冷房にブルツと体を震わせ、物珍しそうに眺めている運転手に那覇へ急行するように命じたのだった。タクシーは白い砂塵を立てて農道を進み、川沿いのアスファルト道路に出た。

「あっ」

泉は思わず藤井の体を押さえて、後部座席に身を伏せた。

「何ですか、あれは」

驚きに調子はずれの声を上げて運転手が言った。まるで戦争が終わって山の奥から初めて姿を現した時のようにあ、あ

る者は呆然とし、ある者は泣き、笑い、怒りに興奮しながら、老人から幼い子供たちまで列をつくって村人達が入神川の河口へ足早に歩いているのだった。いつの間に気がついたのか、体の下で泣いているとも笑っているともつかない、クックツという鳩のような声を出している藤井をさらに強く押さえつけて、泉は「急いでくれ」と運転手に怒鳴った。

「まったく沖繩くんだりまで来て、一週間もかけて何ひとつ取材しないで帰るなんて、こりゃ、大目玉だな。まったく、とんだ人についたもんだ」

飛行機に乗り込んでやっと一息ついた泉は、あわてふためいて村を後にした自分の態度がまったく小心翼翼としたものであったという屈辱を覚えて、やり場のない怒りを内心で藤井にぶつけていた。この人もうだめだな、泉は哀れむような眼差しで藤井を見ると、あくびを噛み殺した。

藤井は眠ってしまったらしく、だらしなく口を開けて窓の方に頭を傾けていた。禁煙のランプが消え、泉は自分の安全ベルトをはずしたが、藤井はさっきのように突然起き上がりでもしたら困ると思う、そのままにしておいた。

「泣き御頭」という名前は、風音がまるで泣いているかのように聞こえるための命名であるが、このことは、泣き御頭が「泣き御頭」と名付けられ、共同体に意味づけられているということを指す。つ

まり風音を「泣いている」という風に解釈し意味づけているのは、ほかでもない村なのである。この点で、先行研究が指摘する、風音を意味づける力学に、清吉と藤井のほか、村が付け加えられなければならない。だからこそ初出では、風音が破壊されたとき、村もまたその意味づけを失い、混乱しなければならなかったのだ。そして泣き御頭が破壊されることで、村人たちは今までの生の根柢をはく奪され、再び終戦直後と同じ場所から出発しなければならなかった。改訂版において削除されたが、村というモチーフは再び、『風音 The Crying Wind』で前景化することになる。「泣き御頭」が破壊されない、ということは初出、改訂版と違って、むしろ村の共同体的側面が保持されているのだ。泣き御頭も村に安定して位置しているようで、その意味では『風音 The Crying Wind』において共同体の意味づけを許してしまうことになる。

村は、初出において既に崩壊がはじまり、泣き御頭を意味づける暴力的なものとして表象される。しかし改訂版ではまだ崩壊は始まっておらず、「観光」によって、村が突き崩されようとしていることが示唆される。『風音 The Crying Wind』では、その崩壊は描かれず、むしろ村の共同体的側面が強められている。改訂版と違い、『風音 The Crying Wind』で最後に風音を聞くのは、清吉一人ではない。しかも、風音は所有できるものとされている。

藤野は海を見た。この海に真一をはじめ多くの若者たちが

散っていった。そして今も安らかに眠ることができないまま、あのときに言えなかった言葉を波と風の音に乗せて訴え続けているような気がした。その声に耳を傾けようとする人は日々少なくなり、答えようとする者はほとんどいない。そして時代はまた、あのときのように変わりつつある。泣き御頭はいつまで風音を鳴らし続けるのだろうか。そう思うと胸が痛んでたまらなくなる。

波音の中に静かに、しかし、くつきりと流れていたあの音が、今も藤野の体の奥に響いていた。その音が消えることはないだろう。その音に真一が伝えようとした言葉を聞いた。藤野はそう思ったかった。

(中略)

生きていこう。最後の瞬間まで自分を保って。真一も自分に言い聞かせたに違いない。

風音はきつと最後の瞬間まで、私の心の奥で鳴っていて励ましてくれる。

藤野は胸の中でそうつぶやくと、目を閉じてシートにもたれた。

『風音 The Crying Wind』では泣き御頭が破壊されない。そのため風音は、清吉以外の登場人物にも聞こえてくる。このとき「胸」と「奥」という言葉が多用される。まさしく藤井の代わりに登場し

た藤野において顕著だが、風音が所有され、生への意味づけへと変化している。アキラの場面では、アキラだけでなく「他の少年も驚いた顔で海の方を見て、一人、二人と立ちはじめ」。泣き御頭が共同体へと受容されているのだ。

泣き御頭はもはや、この村、この島の一部になっている。風音が消えるということが何をもたらすのか、清吉には予想できなかった。

「風音」が消えたとき、村は崩壊する。だからこそ追悼の主体たろうとし、死者に依存する国家に初出、改訂版はするどく対峙できた。しかしこの箇所が示すように、泣き御頭は村、島の一部に抜き差しならないものとして所有される。

このようにして、「風音」は何度も呼び出されるのだが、映画を経た『風音 The Crying Wind』では明らかに初出と改訂版との間意識を異にしている。こうして、『風音 The Crying Wind』は初出、改訂版と切り離し、新たに読まなければならないテキストとしてあらわれるだろう。

初出から改訂版への改稿過程とその成立背景、そして『風音 The Crying Wind』への「小説化」への過程を分析していくことで、その時代に翻弄される作品「風音」が浮かび上がってきた。「風音」は、初出、改訂版、そして『風音 The Crying Wind』として姿を

変える一九年もの間、一貫して死という出来事に向き合い続けたテクストだった。

注

- (1) 目取間俊『風音 The Crying Wind』リトル・モア 二〇〇四年四月
- (2) 花田俊典「目取真俊「水滴」(沖繩はゴジラカーへ反)オリエンタリズム/南島/ヤポネシア」花書院 二〇〇六年五月 ※初出「花田俊典が読む 目取真俊「水滴」『西日本新聞』一九九七年一〇月二六日)
- (3) 新城郁夫「〈企て〉としての少年/目取真俊論」(『沖繩文学という企て 葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会 二〇〇三年一〇月 ※初出「〈企て〉としての少年——目取真俊論」『新潮』八月号 一九九八年八月)
- (4) 丸川哲史「世/代の継承 目取真俊と崎山多美を切り口として」『ユリイカ』八月号 青土社 二〇〇一年八月
- (5) 高口智史「目取間俊・沖繩戦から照射される〈現在〉——「風音」から「水滴」へ——」『社会文学』第三一号 日本社会文学学会 二〇一一年二月
- (6) 小林昭「沖繩と目取真俊の文学」(『民主文学』日本民主主義文学会 二〇〇六年八月)
- (7) 村上陽子「喪失、空白、記憶—目取真俊「風音」をめぐる—」『琉球アジア社会文化研究』第一〇号 琉球アジア社会文化研究会 二〇〇七年一月
- (8) スーザン・ブートレイ「第三章「風音」論」『目取真俊の世界』(オキナワ)
- (9) 歴史・記憶・物語』影書房 二〇一一年一二月
- (9) 目取間俊『沖繩「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会 二〇〇五年七月
- (10) ちなみにこの新聞メディアの特質を利用した目取真俊の作品として、新城郁夫が「第二章 沖繩の政治的主体と対抗暴力『沖繩イニシアティブ』と『希望』」(『沖繩を聞く』みすず書房 二〇一〇年一月)で、一九九九年六月二六日の『朝日新聞』夕刊に掲載された「希望」をあげている。「希望」の冒頭は「六時のニュースのトップは(略)」とあり、このことが「小説世界と現実世界とがその距離を喪失するような幻惑的仕掛けを介して、新聞の読み手と創出される「国民」を沖繩における政治的暴力のなかに引き込んでいく」と述べる。初出「風音」において、ここまでの強い引力は認められないが、テクストの射程を解き明かすに、新聞というメディアの特質が手掛かりとなった。
- (11) 中曽根首相の靖国神社公式参拝に抗議する会「遺族の声とどく」行路社 一九九四年一二月
- (12) 高橋哲哉「靖国問題」筑摩書房 二〇〇五年四月
- (13) 『沖繩タイムズ』一九八五年八月一六日
- (14) 安田武「人間の再建 戦中派・その罪責と矜持」筑摩書房 一九六九年一〇月 ※初出「靖国神社国営問題」『朝日ジャーナル』一九六九年三月三〇日
- (15) 三島由紀夫「英霊の聲」『文芸』六月号 一九六六年六月
- (16) 一九四六年一月一日
- (17) 上杉和央「那覇から摩文仁へ—復帰前沖繩における「慰霊空間の中心」—」『二十世紀研究』第七号(二十世紀研究編集委

員会 二〇〇六年二月)

(18) 佐藤卓巳『増補 八月十五日の神話 終戦記念日のメディア学』筑摩書房 二〇一四年二月(※初出 二〇〇五年七月)

(19) 編者 朝日新聞社会部『日航ジャンボ機墜落——朝日新聞の24時』朝日新聞社 一九八五年二月

(20) 高橋哲哉『靖国問題』前掲

(21) 村上陽子「喪失、空白、記憶—目取真俊「風音」をめぐって—」前掲

(22) 森謙二『墓と葬送のゆくえ』吉川弘文館 二〇一四年二月  
「死者の尊厳性」をまもることとは、抽象的で普遍的な概念であるが、それは死者を「埋葬」することであり、死者と社会との繋がりを記憶し死者の安らぎをまもることである、と理解しておきたい。この行為は、死者の行為ではない。残された生者の行為である。

(なかいまけんいち 本学大学院博士後期課程在学)